

令和元年度文学研究科修士論文要旨

中国の水陸会について

文学研究科宗教学仏教学専攻 仏教学仏教史学研究(Ⅰ)専修 林 月 燕

本論文は水陸会の意味と歴史を明らかにしたものである。更に中国にある天台宗の本山の一つである玉泉寺の実例を挙げて、現代水陸会の実践を詳しく説明する。

水陸会は、水陸斎、水陸斎供、水陸大斎、水陸道場、水陸法事などとも言う。水陸会は仏教行事の中で最も重要な法会である。中国仏教を論じるにあたって、水陸会は避けて通れぬ論点であると言えらるであろう。特に仏教儀礼や中国仏教の儀軌制度を紹介する際、水陸会は重要な位置を占めている。学界においては、中国人学者の周書迦と日本人学者の牧田諦亮による研究が最も影響力があるとされている。

水陸会に言及した周書迦の論文によれば、水陸会の正式名は「法界聖凡水陸普度大斎勝会」であり、北宋時代に興隆した仏教儀礼の一種である。周書迦は水陸会が唐時代の密教の冥界供養と梁武帝の『慈悲道場懺』が組み合わさってできたものだと考えている。牧田諦亮によれば水陸会は焰口儀礼の一種であり、一種の施餓鬼供養であるとされる。

水陸会の研究において、儀軌の研究は欠かすことができない。現在、実際に僧院において水陸法会を挙行する際は、『水陸儀軌会本』を儀軌として使用している。近年、水陸会儀軌の研究文献に敦煌本を加える者も増えているが、解説が困難でなかなか進まず、本格的に研究に活用されるには至っていない。

第一章では水陸会と無遮大会の関係について述べる。水陸会とは、普く十方界に食を施すことで功德を積み、幅広い利益を享受することを目的とする儀式である。無遮大会の「無遮」は一切平等慈悲の意味で、聖凡・道俗、一切を区分することなく、平等に財法二施を行じる法会を無遮会といい、特に大きなものを無遮大会といい、五年に一度挙行される。インドのアショーカ王に始まるといわれ、中国では『仏祖統記』によると、梁の武帝が大通元年(527年)に最初に挙行したとされる。また諸々の儀軌文献において、「無遮」と「水陸」は同義に扱われ、

無遮大会が水陸会と呼ばれたり、水陸会が無遮大会としてと呼ばれたり、あるいはあわせて「無遮水陸」または「水陸無遮」と呼ばれることもある。

第二章では文献に基づいて水陸会の歴史を考察した。主に次の三つの面について検討した。

第一節では梁武帝と英禪師および水陸会の関係を述べる。梁武帝が無遮会を行った際、使用していた齋儀文である『東都発願文』や韋述の『兩京新記』、劉練の『隋唐嘉話』などの英禪師の事跡に関する記述が、梁武帝が最初に水陸儀を作ったことや英禪師が行った薦亡施食齋の記録が信頼に足る歴史的事実であることを証明している。また宋時代の水陸会に関する記録も決して根拠のないものではない。

第二節では水陸儀に中心として水陸会の歴史について述べる。

第三節では、宋代の最初期に著された楊鵬の『水陸儀』について述べる。

第三章では、中国天台宗の本山の一つである玉泉寺の水陸会を実例として、現代の水陸会の具体的な意味、水陸会の構成について述べた。

玉泉寺の水陸会を解析することで水陸会に特有の儀礼装置や荘嚴について明らかにした。第一は仏教の經典、懺文などの經文類である。第二は、水陸会が開催される時に掛けられる水陸絵と聖牌について述べた。水陸研究において水陸絵は常に注目を集めているが、本論では、玉泉寺の水陸の聖牌について重点的に紹介した。第三は、水陸会で演奏される音楽について述べた。水陸会の音楽は強い地域性を持っており、地域や習慣が異なれば水陸会も異なり、その音楽もまったく異なる。第四は、道場の儀礼設定で、たとえば吉日を選ぶことや幡の様式、また封書の形式などのことである。ただし、具体的な事例を検討していくと、上記のような所定の方式は伝承や地域、時代によって変化することが往々にあることには留意しなければならないことが明らかとなった。

中世熊野参詣の研究

——参詣記を通して——

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(I)専修 水 野 未 奈

古代・中世を通じて盛んにおこなわれた熊野参詣について、その時代数多く作成された参詣記を網羅的に収集し、それらを比較することで従来とは異なった視点で検討することを目指した。

第一章では、現存する参詣記を出来る限り収集し、編年順に整理した。ここでは単行で参詣記として流布するもの以外、『為房卿記』『中右記』などの日記の中に含まれるものも対象とした。また、記主本人が主催して参詣するものばかりでなく、院・女院などの熊野御幸に随行した記事として載せられているものも含んでいる。全体として平安末期から鎌倉期(1100年代から1200年代)に集中していることがわかるが、なかでも鎌倉中期の貴族藤原頼資の参詣記がまとまって残されており、その原因について考えてみた。結果、①自身が院の御幸の雑事に関する官職に就いていたこと、②頼資子息の経光が「家記」として亡父の参詣記を院に提出することを求められていたこと、③経光が公事に関わることでなく、信仰面においても父頼資の日記を参照・抄出していたこと、④それらが「広橋家記録」としてそのまままとめて現在まで継承されたことなどが確認された。

中世後期に一点のみ残されている実意『熊野詣日記』(将軍家の妻室や関係者らの参詣)を鎌倉期以前の参詣記と比較してみると、室町期の人びともかなりの回数熊野に参詣していることが知られ、また、王子社などで形成されていた前代の習俗を維持していこうという姿勢が感じられた。結果、従来言われてきたような中世後期における熊野参詣の衰退については単純にそのように評価してしまうことには問題があると考えられた。また伏見宮貞成親王による『宝蔵絵詞』に含まれる切目王子の縁

起への関心は、室町期の人びとがいまだに熊野参詣に強い関心があったことを示している。貞成親王の日記『看聞日記』に見える宮家の人びとの熊野参詣の様子からもそのことはうかがえる。

第二章では、参詣記の比較によって浮かび上がった、時代を通じて重要なポイントとなる王子社と京内外の関係寺社との関係を考察した。

第一に、中世後期に至るまで、参詣に際して主要な王子社をたどりながら同じ経路を用いて参詣しようという意識を持っていたことが知られるが、近世の参詣記『三熊野参詣日記』の頃には王子社は登場しなくなり、高野山を経由するなど経路にこだわりも見られなかったのであり、参詣に対する意識は、中世末期に変化したとみるべきだろう。

また熊野参詣に際し、畿内のスタートポイントともいえる天王寺と京への入口にある伏見稲荷社が中世において一貫して立ち寄りがあったことに注目した。太子信仰などで有名な天王寺であるが、院政期の頃より王権と関連した儀式が行われる場として機能しており、さらに熊野参詣における最初の宿泊地・休息地として機能していたことが明らかになった。一方、熊野参詣の場合、帰洛前に必ず伏見稲荷社への立ち寄りがなされることがわかった。この立ち寄りには熊野参詣以外にはあまり見られず、熊野信仰と稲荷信仰は複合していたように思われるが、その歴史的背景までは追うことができなかった。

近世の『三熊野参詣日記』についても分析は行なったが、時間的な制約もあり十分な比較ができなかった。伊勢など他の参詣記との比較などを通じて深めるべき課題も多いと感じている。

台湾における戦時体制と台湾空襲について

文学研究科歴史学専攻 東洋史研究(Ⅱ)専修 小澤聖也

台湾空襲は、東京大空襲や広島・長崎両市への原爆投下と同時期に、米軍により展開された空襲であり、台湾全島各地域に破壊をもたらした。こうした戦争被害に関する研究は、日本本土における空襲被害の実相や状況の解明について、かなりの進展を見せている。だが、「植民地」台湾における空襲被害に関する研究はほとんど進んでおらず、とりわけ、日本人による研究実績は皆無に等しい。そこで、本論では、台湾空襲に焦点をあわせた戦争被害の状況、そして日中戦争開戦後の台湾の戦時体制や社会状況がいかなるものだったか解明する。台湾における日本統治の瓦解を捉える研究でもある。

第一章では、台湾における戦時宣伝や戦時統制をテーマにした。陸軍記念日・海軍記念日・首都南京陥落・皇紀2600年記念行事を題材に、銃後意識の浸透と印象操作についてアプローチした。空襲に備える民防空態勢の形成を見ることで、戦時下の集団化と強制について考察した。さらに1944年の「決戦非常措置」の発令により、台湾が戦争へ集中化していく姿を論証した。

第二章では、台湾防衛と軍事展開をテーマにしている。そこで、1944年・45年に発令された十号・捷号・捷一号・天号・沖縄作戦の五つの作戦に着目した。1944年

段階では、航空作戦の拡充・全島各地への飛行場建設・レイテ作戦への協力態勢、1945年に至ると特攻作戦の構築や持久作戦への展開など、台湾の軍事的位置づけとその変化を論じた。

第三章では、本論文の核となる台湾空襲の被害実態をテーマとした。台湾空襲の被害概況について、死傷者や落下弾数を州庁ごとに照合することで、被害の地域性を解明した。夜間空襲における軍事基地破壊や飛行場破壊、台湾各都市への民間被害など、軍事・民間双方で壊滅的な被害をもたらしたことを実証した。また、日月潭発電所や縦貫鉄道への空襲被害に触れることで、ライフラインや物流面の破壊に着目した。台湾と沖縄は戦場として一体化されており、沖縄戦と台湾空襲の共時性にも言及した。そして、空襲により台湾住民はどう避難したのか、オーラルヒストリーをベースとする資料や『台湾新報』などを用いて、台湾における疎開や避難について追究した。そして、本土空襲と台湾空襲の比較検討を行い、米軍空襲全体の推移や被害傾向の分析に挑んだ。

以上のように、戦時下の台湾の実態解明に終始したが、この戦時下の状況が戦後の混乱へ、影響したことは間違いない。

「義兵闘争」の実態と特色 1907-08年

文学研究科歴史学専攻 東洋史研究(Ⅱ)専修 柴田 諒平

本論文では、保護国期間に日本の朝鮮侵略行為に対して行われた朝鮮人による闘争がどのような実態、特色があったのかを論じる。そのため、1907年から1908年中ごろまでの期間を分析対象とした。この期間の大韓帝国では大きな変革が起きていた。それが高宗の強制退位と韓国軍隊の解散である。前者は1907年オランダ・ハーグで行われた「ハーグ密使事件」の責任を取る形で高宗が退位、後者は「第三次日韓協約」の締結に伴い、国家防衛の骨幹となる軍隊が解散させられた事件である。特に韓国軍隊解散は1907年から1908年にかけて展開された「義兵闘争」では、義兵側に大きな影響を与えた。その影響がどのようなものであったのか、そして義兵側はその影響を受けてどのような闘争を展開していったのかを論じる。

朝鮮保護国期間の研究では、保護国期間が韓国併合への過程と見なされているという観点から、当該期間の研究が少ないことが指摘されている。また義兵闘争に対する研究では、義兵への弾圧がその後の大韓帝国への「植民地支配」のモデルケースになったという議論が展開されている。しかし、昨今では日韓双方において「義兵」への研究の不十分さが危惧されている。なぜなら従来の「抗日」という観点だけでは、グローバル化によって民族主義が時代にそぐわないという点が大きな要因である。したがって、朝鮮保護国期間にさらにフォーカスして、韓国併合とは別離させて「義兵」という日韓双方に関わる事象を考察する必要があると考えられる。

本論文で使用した中心史料は、『朝鮮暴徒討伐誌』と『暴徒編冊』、『◎暴徒檄文集』である。『朝鮮暴徒討伐誌』は、1906年から1911年までの「義兵闘争」を討伐勢力であった韓国駐節軍、韓国駐節憲兵隊、警察隊の討伐行動を詳述されているものである。朝鮮半島の地方ごとに討伐状況をまとめていったものであり、日本側の「義兵闘争」の公式データと言えるもので、今回活用した。『暴徒編冊』は、1907年から1910年までの各地方の討伐機関の電信

通牒、報告書などをまとめていったものであり、「義兵闘争」の討伐実態を解明できる好史料である。『◎暴徒檄文集』は義兵が発表した檄文が収録されているものであり、当時の義兵の思想や、義兵が何を敵視していたのかを判断する事に非常に適する史料のため活用した。

本論文では、第1章では、「義兵」が何を敵視して、年月を経てどのように活動していったのかを考察した。従来、「義兵」には「火賊」という相似的存在であった。この両者に対して、日本は活動地域の違いという観点から区別していたが、実際には、「義兵闘争」の全国展開に伴い、両者が混在、融合していった。ただし「排日」思想の有無から明確に義兵が存在していた事を明らかにした。また、「義兵」に対して敵視する存在、目的を檄文から考察した。当初は日本という国家を敵視していたが、それが徐々に大韓帝国の親日的政治家に広がり、一般の朝鮮社会にまで拡大した事を明らかにした。

第2章では、閔肯鎬、李康年、許蔭という3人の義兵将に焦点を当てて、その3人の共通点と差異について考察した。その結果、この3人が義兵将になったプロセスはそれぞれ異なっているが、その根底には韓国皇帝及び皇室、そして国家の防衛を主軸に置いていた事を明らかにした。また許蔭のように日本と大韓帝国の差を痛感している人物もあり、日中韓の3か国による東洋平和を説いている者もいた。

第3章では、義兵の組織的連関を考察した。そのために、李麟榮という義兵将に焦点を当てて、「十三道倡義軍」の行動を分析した。『朝鮮暴徒討伐誌』には「十三道倡義軍」の行動は記載されていないが、これは記録を採る際に李麟榮という名称を誤って他の名称で記載したために起きた事であると分析し、時期、場所から記録を読み直して、「十三道倡義軍」の行動を再構成した。その結果、低水準ながらも「義兵」には統一された指導があったが、強権的に指導されたものではなかった点が連合義兵の失敗した原因であると結論した。

後期旧石器時代における角錐状石器の様相

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅱ)専修 田 崎 夢 佳

日本列島における本格的な旧石器時代研究は1949年の群馬県岩宿遺跡の発掘に始まる。このとき発見された槍先形尖頭器は、調査で出土した搔器などともに岩宿Ⅲ?文化層として位置づけられた。そして、その後期旧石器時代における槍先形尖頭器が盛行する前段階に盛行する石器として「角錐状石器」があげられる。角錐状石器は全国的にみられるが、地域ごとに形態的・技術的な差異が生じている。

本論では、その差異が生じる理由の一つとして、当時の環境的な要因があると推測した。この推測の正否を確かめるべく、老松山遺跡と羽佐島遺跡を参考に、角錐状石器を機能・形状より4分類したのち、古環境等と比較・検討した。

角錐状石器は始良 Tn 火山灰(AT) 降下直後に出現し、ナイフ形石器の終末期まで継続的に共存する。

分布は西南日本を中心に全国的に盛行する。九州地方は1つの遺跡において出土する数が多く、佐賀県老松山遺跡では600点以上の角錐状石器が確認されている。また福岡県宗原遺跡では削器や剥片はあるものの、ナイフ形石器が共存しない特殊な組成をしている。

瀬戸内・近畿地方では角錐状石器とナイフ形石器の結びつきが強く、ナイフ形石器を主体とする中に角錐状石器が伴う石器群が多い。発見されている角錐状石器は細長く入念な周辺加工が施されている1類が多くなるが、出土する数は九州地方に劣る。

中部・東海地方では、1遺跡において出土する数が1点ないし数点であり、大きさも小さくなる。遺跡において主要な狩猟具として利用されていたとは考えにくい。

関東地方の角錐状石器は南関東を中心に多数分布している。形態は先端部を意識した細身の石器ではなく、ずんぐりとしており、刺突機能を想定しにくい甲高な3類と非常に小型の4類が増え、使用する石材もまばらである。

各地方ともに2類に分類されるものが大半をしめ、北へのぼるほど、出土総数が減少し、分類としては刺突機能の想定できない3類、4類が増加する。角錐状石器に

使用されている石材は、種類に違いはあるが、在地の石材を使用していると思われる。

また日本列島の古環境ついて、確実な人類活動が認められるのは、較正年代で約4万年前よりも新しい時期である。この時期の気候変動を長期間にわたって連続的に記録しているものとして、湖沼堆積物や、海底堆積物、グリーンランドや南極の氷床コアなどがある。

日本列島の旧石器時代を対象としたときに、大きく関連する海洋酸素同位体ステージ(Marine Isotope Stage 以下 MIS)は、MIS3とMIS2であり、後期旧石器時代前半期の遺跡群の年代は、MIS3のEarly Cold(約38,000~28,000 cal BP)以降の時期に位置付けられる。

この時期はMIS3前半の温暖期がすでに終了し、最終氷期最寒冷期に向かい、気候の寒冷化が顕著になる時期であるが、九州地方から本州島北部まで旧石器時代遺跡が増加する。AT 火山灰の降灰期と前後して気候は寒冷傾向が強まるが、立川ローム層X層~VI層段階及びV層下部段階の一部石器群がこのEarly Coldの時期に該当する。

角錐状石器が出現、盛行する頃の古環境はMIS2のLGM Cold-1(約28,000~24,000 cal BP)に相当し、寒冷で乾燥した気候であったと推測されている。このMIS2のLGM Cold-1に相当する石器群は、立川ローム層V層段階及びIV層下部段階であり、この時期には最終氷期のなかでも最も寒冷化が進行したと推測される。

以上から、角錐状石器を製作する際、あまり遠出をすることなく手に入る在地の石材を使用するのは妥当な選択と思われる。また、角錐状石器が盛行する西日本、特に大きくかつ細身の1類が多めに出土する九州地方の北東部から瀬戸内地方にかけては、草原地帯であったと考えられている。当時狩猟具として活用していたのであれば、狩猟対象は草原にいたことになる。草原地帯での狩猟はおのずと対象との距離が遠くなる。草原地帯において群れる対象を遠くから投擲等で狙うため、細く長く、また重く投げやすい形状へと発達したものと考えられる。

東海地方における縄文時代後晩期の石器について

——磨石類を中心として——

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅱ)専修 成瀬陽介

本論文では、縄文時代後・晩期の「磨石類」と一括して報告されている石器の持つ諸属性を、磨石類の分類の重要性及び磨石類に付属する諸属性の特徴を指摘する。ために石器組成の検討からみえる遺跡内での磨石類の状況や、愛知県において著名な貝塚遺跡である田原市保美貝塚の磨石類の様相を、自身も整理、報告に携わった豊田市足助町今朝平遺跡の磨石類の報告において用いた視点から検討を行った。

第1章では、磨石類の研究史を概観した。研究の初期はいわゆる「凹石」の機能・用途研究が主流であったが、農耕論や石皿とセットでの出土することから、痕跡による分類による「磨石」の名称が主流となっていく。その一方、後藤秀一氏が指摘したように、出土事例が増加する中で痕跡の重複事例の増加に伴い器種分類が困難となり、現在各所の報告書では、「磨石類」といった総括名称が用いられている。

しかしながら、「磨石類」の名称は本来区別されるべき痕跡である「磨痕」と「敲打痕」が同じものとして理解されてしまうため、遺跡内での活動の復原などにおいて誤った解釈がなされてしまい問題であろう。また痕跡によって石器の認定される石器ではあるが、礫形状などの形態的特徴の検討が欠けている状況にある。

第2章では、磨石類の研究史上から認められた課題を解明するために、石器組成の検討を行い、遺跡における磨石類の位置付けを検討し、遺跡の生業活動を組成論から検討を行いつつ、磨石類の分類の必要性を指摘した。

その結果、特定遺物の製作遺跡から出土している磨石類には、製作に伴うハンマーの出土があり、短絡的に磨石類＝植物加工工具として評価できない状況が指摘でき、使用痕による分類が重視されるべきであることが指摘できた。また、遺跡ごとの環境適応に伴う結果と考えられる石器組成の異なりがみられ、地域ごとの特徴として、山間地域遺跡の打製石斧の主体的な出土、徳山地域の切目石錘の多量出土、海浜地域の打ち欠き石錘の主体的な出土、中間地域の石鏃の出土といった遺跡ごとの石器組

成からみた環境適応の異なりが指摘できた。

第3章では、足助町今朝平遺跡出土の磨石類を痕跡ごとに観察、分類を行い、石器に伴う形態等の諸属性の検討を行い、問題点の解決を目指した。磨石では、磨痕の形成状況から要因までは迫れなかったものの分類の必要性が認められた。また敲打石においても、小島隆氏の分類を用い分類を行った結果、痕跡に偏りがあることが認められた。

周辺河川の採集礫との比較からは、遺跡出土の磨石類と採集礫との形態差がみられ、素材を全て遺跡直近で採集されたわけではないことが示唆された。

第4章では、田原市保美貝塚の磨石類の形態的特徴の検討を行い、周辺の石材環境との比較は行えなかったものの、素材礫の偏りが認められ、一定の規定をもって素材を選択していたことが示唆された。

第5章では、特定遺物の製作遺跡と磨石類多量出土遺跡の磨石類の検討を行った。そこから磨石類とする石器の中には植物質食糧加工工具以外の機能・用途を内包した磨石・敲打石・叩石が含まれ、磨石には植物質食糧加工以外に顔料加工の用途があり、敲打石と叩石には植物質食糧加工以外に石器製作の用途が考えられる。また敲打石・叩石は同一の痕跡（敲打）を有する石器であるが、対象物や動作が異なる可能性があり、分類が必要であることが指摘できた。そのため、磨石類の使用痕から機能・用途の推定を行い、痕跡の細別を行う必要があることが示唆された。

本稿では、現状の研究で行われているような科学的分析や実験考古学からの使用痕分析といった手法を行わなかった。そのため、明確な機能・用途の指摘までは至らなかった。しかしながら、遺跡の出土資料を使用痕の観察及び石器に伴う諸属性を検討し、磨石類の位置付けを検討した結果、遺跡内での植物質食糧加工以外の磨石類の利用の状況や、そのことを理解するための器種分類の重要性、磨石類の素材の遺跡への近接地からの搬入の可能性を指摘することができた。

尖頭器における素材生産の意義

——新潟県貝野沢田遺跡の分析を中心として——

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅱ)専修 野村 啓輔

これまでの研究において尖頭器は狩猟具、加工具、植刃など様々な機能をもった石器であると考えられてきた。そのような多くの機能の一つに別の石器を生産するための素材を供給する石核としての機能が推定されており、尖頭器はそれ自体が利器でありながら、石核としての機能も兼ね備えているという解釈がなされてきた。そして、このような尖頭器の機能を前提に、尖頭器の状態で石材を管理することによって、当時の人間集団の不安定な移動生活に適した技術であったということや、効率的な石材消費などといったことが解釈されてきたのである。

ところが、最近の研究では尖頭器の石核としての機能は疑問視されるとする意見も出されており、尖頭器の製作を通して生じる調整剥片が別の石器の素材となっていることは接合資料からも確認されていることから、調整剥片を素材として利用することは確実である。しかし、それがあらかじめ別の石器を製作する際の素材として利用することは想定されていないこと、尖頭器製作から生じる調整剥片は別の石器素材として安定的な供給がしにくいこと、調整剥片を素材とした石器であるとしても微細な剥離痕を有するのみであることが指摘されている。

そこで筆者は、尖頭器の石核としての機能を認めたうえの解釈を行う前に、まずは土台となる尖頭器の石核としての機能について検討することが重要であると考え、新潟県貝野沢田遺跡の分析を行った。

貝野沢田遺跡では尖頭器を主体とする石器群が確認されており、尖頭器や尖頭器未成品、スクレイパー、抉入削器などとともに、非常に多くの調整剥片が出土している。このことから、尖頭器の製作址であることが考えられている。貝野沢田遺跡における石器石材は無斑晶ガラス質安山岩と呼ばれる石材がほとんどであり、この石材は志久見川から信濃川にかけて見られることが分かっている。しかし、貝野沢田遺跡の位置する近辺にはその石材を確認することができないとされていた。今回筆者が貝野沢田遺跡の石材環境を確認するために、遺跡近辺の踏査を行った結果、遺跡近辺においても無斑晶ガラス質

安山岩を確認することができた。しかし、ここで確認することができた石材は拳大程度のものが多く、貝野沢田遺跡で見られる尖頭器を製作するには適しておらず、遺跡で利用された石材は、それよりも上流部分で採集されたものである可能性が考えられた。また、貝野沢田遺跡では、尖頭器未成品と調整剥片の接合資料も確認されており、それによると両面調整石器の形で遺跡に石材が搬入されていることがわかっており、そのことから遺跡近辺が石材原産地ではないことを示している可能性が考えられる。

貝野沢田遺跡における尖頭器の接合資料の分析を行ったところ、その接合資料には、スクレイパーなどの二次加工のある石器は含まれておらず、尖頭器製作工程の中に別の石器を製作する工程は存在していなかったように思われた。しかし、調整剥片とスクレイパー類について属性分析を行いそれぞれの特徴を確認したところ、打面形態が切子打面のものが多いことや背面の剥離痕の方向が多方向からの剥離で覆われているものが多いこと、原礫面を残しているものが非常に少ないことといったような調整剥片とスクレイパー類に共通する特徴を確認することができた。したがって、貝野沢田遺跡から出土しているスクレイパー類は、尖頭器製作を通して生じた調整剥片を素材として製作している可能性が高いことが考えられた。そして、このことは、尖頭器が石核としての機能を持ち、スクレイパー類の素材となる調整剥片を安定的に供給していることとは少し異なるものであると思われる。

そこで次に調整剥片とスクレイパー類の出土量をみると、調整剥片の出土量が圧倒的に多く、スクレイパー類の出土量は非常に少ない。また、確認されている接合資料によると、遺跡には両面調整石器の状態で石材が搬入されていることから、剥離される調整剥片の大きさはスクレイパー類の素材となる調整剥片よりも小さくなる傾向にあることが考えられる。そのため、貝野沢田遺跡における尖頭器の機能として、石核としての機能は現時点では考えにくいという結論に至った。